

**[資料紹介] 市場的配置とは何か [下]**

その他のタイトル	[Material] Michel Callon, "Qu'est-ce qu'un agencement marchand?" in Michel Callon et al. Sociologie des Agencements Marchands, Presses des Mines, 2013, pp.325-479.
著者	ミッシェル カロン, 北川 亘太, 須田 文明
雑誌名	関西大学経済論集
巻	67
号	1
ページ	63-85
発行年	2017-06-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/13566">http://hdl.handle.net/10112/13566</a>

## 資料紹介

アジャンスマン  
市場的 配 置 とは何か [下]\*

ミッシェル・カロン 著  
北 川 亘 太  
須 田 文 明 訳

Guyer (2009) は同様の観察を行っている。彼女が言うには、特定の価格は正常であると考えられるのに対して、別の価格は、ふっかけていると判断される。さらに彼女が付け加えるように、こうした判断は、資本主義的市場経済の冷酷で厳格なりアリズムを緩和させてくれるような倫理的価値の名の下でなされるのではない。こうした判断はどのように価格が計算されているかに関わる。倫理的価格とは正確に計算された価格であり、つまり異なった目盛りの（なるほど巧妙ではあるが、同時に、目盛りの間に存在する等価性を尊重した）組み合わせから生じ、許容可能であると考えられる目盛りから生じる。倫理は計算を抑止するものではない。倫理は定式化の中にあり、品質計算に含まれている<sup>88)</sup>。

定式化の作業を記述し、この作業を横断している闘争の諸形態の多様性を考慮するためには、類型化を導入することが有益であろう。不幸にも、経験的な素材はひどく不足している。例を挙げるとすれば、また探求されるに値するであろういくつかの手がかりを指摘するために、お互いに対立した多数の定式化のような基準について考えることができる。これらの基準の私的な、もしくは公共的な性格（それは同一の<sup>アジャンスマン</sup>配置においてさえ、ある場所と別の場所では変わることができる）。使用され、かつ／または提案される人工補装具的 prosthetiques 価格の多様性。異なった定式化により関与させられる計算能力の差異、及び、これらの能力が分散される様式。それぞれの定式化について、数字的・非数字的変数の間での均衡、などである。定式化のかなり大っぴらに物議を醸す性格もまた重要な次元をなしている。というのも（公的）説明の義務がこれに依拠することができるからである。価格が、供給と需要との突き合わせからではなく、お互いに対立している定式化の間での直面から生

---

\*本稿は、Michel Callon, “Qu’est-ce qu’un agencement marchand?” in Michel Callon et al. *Sociologie des Agencements Marchands*, Presses des Mines, 2013, pp.325-479 の全訳である。本文中に出てくる「本書」とは、この Callon et al. のことである。なお、本資料紹介は [上] [中] [下] で上記論文の本文を全訳したのち、[付録] で脚注、参考文献、訳者による解題を記す。

じるということを見ることを受け入れるならば、我々は、判断の作業が支配しているような市場と、選好の計算が課せられているような市場との間の対立から脱却するのである。定式化と反定式化のダイナミズムの分析の膨大な（エスノグラフィ的）作業を遂行することが残されたままであり、それは、明示的で、公的で、量的な定式化のように、分析するのに最も容易である定式化から始めて、私的で、質的・量的な定式化のように研究するのに最も困難な定式化にまで至ることによってなされなければならない。こうした観点から、消費者により精緻化される定式化が特別な検討に値するであろう。私は以下において、この点に簡潔に取りかかることにしよう。

#### ④力関係

価格の確立が市場的力関係と（これが生み出す）闘争の中心にある。定式をめぐる直面が関与させる技術的制約と議論的制約ならびに種別的資源（品質計算的能力やデータへのアクセス等に関するもの）とともに、これらの力関係は定式化の現場で作用している。こうした力関係の分析は、市場的配置アジェンダの社会学にとって優先課題の一つである。後述の観察は、特権化されるに値する場所と疑問について、いくつか指摘するためだけのものではない。

最終消費の側で展開される定式化に、特別な注意が払われなければならないであろう。まず最初に強調されるべきことは、供給の側で、とりわけ工業的供給の側で行われていることに倣って、我々は、量的で、明示的で、公的な定式化の著しい増加に直面している、ということである。こうした進化はとりわけ消費者金融が占めるいっそうの重要性に由来する。すなわち利率の計算や借り入れできる貸付残高の計算、保証金や返済期限の計算、これらの計算は、最も洗練された金融的評価とさえも似たり寄ったりである。こうした価格（ここでは貨幣の価格）計算の支配は、不定期的にしか見直しに至らない一連の告発や要求、抗議はあるものの、借り手（定式化そのものについては言うべきことをもたない）への貸し手の支配を伴う。貨幣の価格について当てはまることは、エネルギー及び輸送の価格にも適用される。すなわちこれらのすべての財やサービスについて、消費者は、自らの所得と支出を関連づけるように促される。たとえそれが、どんな様々な割引や補助金、税額控除を主張できるかを知るためでしかなかったとしてもそうなのである。最終消費者はこうして、ますます根本的に、品質計算の空間に入り込むことになる。道具は供給側により消費者に課せられ、（消費者を保護することを任務としている）組織により、あるいはさらに（そのインターネット上で、予算管理ソフトを自由に使わせる）銀行により提案される。消費者は予算管理者へと変容する。こうしたことは、その予算がきわめてかつかつであるような人々にしか妥当しないと考えるのは間違いであろう。最も裕福な人々にとってさえも、予算管理は、とりわけ経

済のいっそうの金融化のために、品質計算されており、価格の定式化はきわめて重要な争点なのである。消費者が価格の定式化メカニズムを掌握する度合いのバリエーションについての研究と、(このメカニズムの元となる) パラメーターの同定とは、価格設定を前にしての不平等のよりよい理解に貢献することができるであろう。貧困者のためのリボルビング・ローン (Ducourant, 2011; Lazarus, 2012) や富裕者が有している便宜のように、極端な状況が興味深い。

しかし、消費者により実施される (反対—) 定式化の作業の中心部にまで、(この作業が屈折させ、生み出す) 力関係の中心部にまで進むためには、(同一の) 顧客の捕捉のために様々な給付者がお互いに対立し合っているようなありふれた状況に身を置かなければならない。こうした対立の起源を理解するのにとりわけ興味深い状況は、売り手にとってと同時に顧客にとっても、価格が決定的な「品質」となるような状況である。再び携帯電話について考えてみよう。しかし今度は、そのアグレッシブな商業戦略によって、フランス市場での新しい通信事業者 Free の参入時点についてであり、我々は Orange 社の顧客である利用者の側に身を置いてみよう。この利用者が歴史あるこの通信事業者との間に交わっていた契約は、古典的な相対取引に対応し、つまり、成功裡に特異化されていた給付に対応している<sup>89)</sup>。すなわち自分の電話への、(それが可能とさせ、促進する) 行為への利用者の愛着 = 接続<sup>アタッチメント</sup>によって、利用者は、自分に要求された料金を支払うことについて納得してきた。こうした帰結は、支払いを対価とした権利の移転をもたらす一連のフレーミングの到達点である。すなわち、まずは市場的愛着 = 接続<sup>アタッチメント</sup> (支払いの同意を発動させる)、次いで価格についての受け入れられた定式化があり (加入)、そのあとに取引を締めくくる支払いがある。給付を軽微にしか修正しないことで価格を低下させることを提案する Free が登場する。この供給が依拠している確認は単純である。すなわち携帯電話への、またそれが可能とする行為の流れへの利用者の愛着 = 接続<sup>アタッチメント</sup>は、たいていの場合、不可逆的であり、通信事業者のすべて (SFR、Bouygues、Orange などや Free) が依拠している一群のエージェンシーたち (これらのいずれかによってコントロールされてはいない) の参加に、この愛着 = 接続<sup>アタッチメント</sup>は由来している。携帯電話は (相対 biface 市場の理論家により導入されたきわめて示唆的な観念を採用すれば) プラットフォームであり、通信事業者は複数の登場人物の一つでしかない。なるほど携帯電話はアンテナ・リレーなしには、また通信の品質なしには無であろうが、ウェブやアップル・ストア、無数のソフトウェア、(携帯電話がアクセスする) サービス給付、地理測位衛星なしには、やはり無なのである。所与のある通信事業者により提案される所与の財を記述しているバックは複雑で、進化的なデバイスにおける一つの要素なのであり、このデバイスが欠落したり、消失することになってしまえば、このバックは顧客にとって全く価値がないであ

ろう。このパックについては、利用者の加入によって締結されるが、通信事業者によっては1%しか保証されていないような特異化の戦略をこのパックが完成させている、とすることができるであろう。価格破壊を行うことで、Freeは特異化過程を全体として疑問視してしまうことを警戒している。特異化過程は、最終局面でしか登場しない。その供給は（ほとんど）同一の（しかしより安価な）パックを提案することにあるのではなく、他社よりいっそう特異化されている（より低価格なのだから）パックを提供することにある。もちろんこうした特異化戦略の成功は自明ではない。新しい品質（価格）が顧客を獲得し、（他の通信事業者たちから切り離すことで）彼らを継続して接続させることができる限りでしか、こうした成功は得られないのである。

Freeは特異化の強化に参画するのであって、供給の単純なる平板化、供給が関わる財のきわめてありふれた標準化の確立に参画するのではないと言うことは、正しい方向とは逆方向に進み、逆説への嗜好を促すのではないであろうか。強いイノベーションと価格外競争の時期を経て、我々は、それがしばしばお定まりであるように、価格に集中した競争の時期に突入しているのではないだろうか。それは否である。というのも我々が使用し、濫用しているこうした区別は、当該の過程を表面的にしかとらえていないからである。Freeの価格破壊があろうとなかろうと、携帯電話は高度に特異化された財であり続け、この電話は永続的な進化の途上にある社会技術的デバイスへのその統合のために、アイデンティティの開放的再布置化の並行的運動へと、その利用者を巻き込むのである。我々が価格での競争と呼ぶものは氷山の一角でしかない。すなわちその可能性の諸条件は、競争をもたらす特異化の強力な運動に完全に依存している。Freeに傾きかけることで、私は携帯電話への私の愛着＝接続を確認するが、それは、その諸品質の一つ、価格が私に好都合なように修正されていたような携帯電話への愛着＝接続なのである。価格が専一的な品質になるためには、チェンバレンの分析において、売り手の笑顔や自動車の色がそうでありえたように、（決してとどまることなく継続する）長い一連の投資がなくてはならないのである。したがってFreeによって開始されるのは脱特異化の強まりの支配ではなく、特異化と、（それに引き続く）その強化の支配なのである。潜在的顧客は既に接続されているからこそ、また支払いすることに同意するまでに彼が既に導かれていたからこそ、（多くの比較者及び、計算補助者によって支援された）潜在的顧客は価格を比較するまでにいたり、この比較の結果に応じて意思決定するに至ることができるのである。

さらに、品質としての価格 *qualite prix* が特異化の軌跡において決定的変数となるとき、我々は、顧客の捕捉のための闘争における新しいエピソードの開放に立ち会っているのである。Freeにより提案される定式化は、反対一定式化を登場させる。これは、その他の諸品

質の中での単なる品質の地位へと価格を導こうとすることで特異化の過程を方向付け直す傾向にある。異なった給付を持った、異なった価格でのパックが開花し始めている。複数基準からなる表（品質＝価格関係タイプの、つまり Guyer の言う異なった尺度を結合する）を備えた比較者が増加している。こうして特異化が開始され、それはつねにより一般的なデバイスに支えられており、こうしたデバイスは携帯電話を永続的な進化の途上にある財とさせ、電話の適用と使用は、例えば支払い手段としてこれを使用することができることに見られるように、多様化し特異化戦略を促進するのである。

こうした新しい定式化へと至る継起的フレーミングの論理をよりよく理解するためには、影響＝割り振り affectation という単語の二重の意味を想起するだけで十分である。高速道路を運転していて、自分の自動車のガソリンタンクがほとんど空になっていることを示す針の位置によって私が影響される<sup>レ</sup>ときに、私は Total であれ Carrefour であれサービスステーションの一つに割り振られて<sup>レ</sup>おり、その比較看板が私に、その価格を表示するのである。同様に、トゥルーズに転居した級友の一人との距離に私は影響<sup>レ</sup>されているからこそ、また私が彼を訪問したいと感じているからこそ、航空輸送に私が割り振られ<sup>レ</sup>、Air France もしくは Easy Jet により提案されるサービスにたどり着くのである。社会技術的なロックインの状況に関心を向ける人々がよく見てきたように、私は、携帯電話や航空移動、ガススタンドを拒否することから真に自由ではないし、場合によっては私は品質としての価格にしかもはや関心も向けないように成熟しているのである。そしてまさにこの品質計算に自らを投じることによって、私は既存の特異化とそれが切り開く選択空間を補強することに貢献するのであり、つまり私は、私がそれを決断するときに私がしたいことをすることに、よりいっそうの自由を感じるのである。そして私が Free や Carrefour、Easy Jet を選ぶとき、私は、良い買い物をしたこと、良い計算をしたことを喜ぶことさえできるのである。Carrefour や Free、Easy Jet へと私を割り当てるこうした運動が発展できるのは、この運動が、（それに先行していた、また携帯電話や自動車、飛行機を私に選ばせていた）その他すべての割り振りを延長させているからなのである。価格による特異化とともに、消費者は結局のところ、合理的計算の帝国に侵入するのではない。消費者は市場的<sup>アジャンスマン</sup>影響＝割り振り affectio mercantus により自らが運ばれるままにしておくことで、定式にもとづく品質計算をたどるのである。

価格の定式化作業についての、定式と品質計算の可能な複雑性についての上述のことは、計算的能力（とコンピテンス）の間での非対称性についての上述の考察と関連づけられなければならない（私が行論上、指摘してきたように）。定式が複雑であるほど、すなわち定式がより多数の人工補装具的 prosthétiques 価格 Pi に依拠するほど、定式により考慮される（価格以外の）変数は多くなり、その評価は論争含みとなり、特定の Pi の設定に必要である媒

介的計算（例えばコスト）はよりいっそう複雑で、多数となり、さらに、これらの価格と変数を増加させることができるエージェントと、データへのアクセスを持たなかったり、計算を行うために設置されている道具や力を保持していないために、そうすることができないエージェントとの間での溝が穿たれる機会が多くなる。不動産市場についての Bourdieu (2005)（彼が、売り手と不動産取得候補者との間の交渉を分析する際の）、綿花市場についての Galiskan (2010)（エジプトの農民と、（綿花玉の価格についての自らの計算の中に、別の多くの取引所に由来するデータを介入させる）取引商人との間での価格交渉を彼が記述する際の）、さらにはトレーダーの賃金設定についての Godechot (2007)、これらの研究はこうした支配関係と、これを不可視化させるために構想される舞台設定を説明してくれるのである。さらに、あるエージェントを服従させるための最も効率的な戦略の一つが、彼の代わりになされる計算的オペレーションの迷宮の中で、このエージェントを宙ぶらりんにさせることで、全く単純に、計算を妨害することなのである（Callon & Latour 本書；Callon & Law, 2005）。

非常に多くの場合、被支配的エージェントは、自らがおかれることになる服従の地位を受け入れ、自分の相手により提供される価格の中に、市場法則しか見ないのである。我々が理解したであろうように、こうした法則が存在するとしても、それは、品質計算において最も強いものの法則なのであり、市場の法則なのではない。定式化の（アルゴリズム的）空間の考慮が、結局、いかなる条件において、かの有名な需給法則が適用されるのかを理解するための新しい展望を切り開くのである。Mitchell は、石油市場の事例において、1974年の危機の時点において、経済学の教科書で規定されているように市場が行為するために、また供給減少に引き続いて価格上昇が起こるために、必要であったすべての操作を示したのである。同様に、Reverdy は、今度は、電力市場について、競争増加（価格を減少させたはずである）を、逆に、価格の投機的上昇を発動させた要因とさせるに至ったメカニズムを解明したのである。すなわち供給需要水準と、価格設定との間に、定式化の空間が介入するのである<sup>90)</sup>。

##### ⑤アクターと観察者

（経済学者であれ社会学者であれ）価格設定メカニズムを解明しようとする観察者は、エージェントたちにより精緻化され、使用されている定式化から出発しなければならない。我々が仮説として主張することができるのは以下のものである。すなわちエージェントが明示的で、量的で、公的な定式化の構想と実施に関与すればするほど、観察者自身が、（例えば価格の進展について予測するように）、定式により許容された計算を延長し、集計し、場合によっ

ては変容させるのに好都合な立場によりいっそう置かれることである。この場合、観察者とエージェントとの間の境界線は薄れるのである。なんとなれば、お互いは、少なくとも部分的には公になることを目的とした同一の事物（定式）について作業しているからである。しばしばコンフリクトに満ちたこうした協力は、情報通信やエネルギー、運輸といった領域でよくあることである。ここでは私は、Marcel Boiteux についての、また彼が電力料金設定において果たした役割についての Guillaume Yon の近年の研究（近刊）を指摘するにとどめよう。すなわちフランス電力 EDF のトップとなることになる人物により提案された価格の定式化は、（職業的エコノミストの作業を延長させ、これを顕著に豊富化させた）研究作業に由来していた。つまりアクターたちとアナリストたちが同一の事物を共有していたのである。いっそう驚くべきことには、数十年の後に、スポット市場で EDF により実践されている料金が、企業により負担されている限界費用に確かに対応しているかどうかを検証するために欧州委員会によりなされた勧告と、ほとんど近似していることがわかったのである（上述を参照）。価格定式化の作業へのこうした収斂が強調されればされるほど、現実の<sup>アジェンスマン</sup>配置が、特定の教科書により記述された<sup>アジェンスマン</sup>配置のように行為する可能性がいっそう高まるのである。

市場的<sup>アジェンスマン</sup>配置について外在的な分析と内部的な分析とを区別することは幻想であろうということがわかる。というのも我々は定式化を考察しているからであり、定式化の構想が広範に分散されるように条件が結合されているからである。逆に、定式化がそれほど明示的でないような場合、また定式化が質的な変数を優先している場合、また定式化が広範に、私的なままにとどまっているような場合には、観察者は困難な状況にいるのである。市場的<sup>アジェンスマン</sup>配置は不透明となり（エージェントはこの<sup>アジェンスマン</sup>配置を不透明にすることに専念しようとするからである）、学術的協力が課せられる。すなわち調査や研究は、（定式化を変容させることで）これをより明示的に、量的にさせ、それほど私的にはさせないのである（それこそ透明性と呼ばれるものである）。この場合、社会学と人類学が、経済学（その認識論的文化はこの学問に対して、こうしたフィールドワークにそれほど積極的でないようにはたらきかけている）に対して重要な競争優位を享受する（Guyer を参照せよ。彼女は驚くべき、理論的・経験的冒険の果てに、これらの定式化を再構成するに至ったのである。たとえ彼女がこの単語を使用していないとしても）。しかしながら最もしばしば見られる布置は、暗黙的で、私的で、質＝量的な定式化の大海原の中で迷子となっている、明示的で量的で、公的な定式化の島々を含んだ布置なのである。

これまで私は配置 agencement という概念を使用してきたが、この語句の選択を正当化しようとはしてこなかった。なぜ私は装置 = デバイス dispositif や合成 assemblage といった概



念のような、類似した、またより通用しているように思われる使用法である概念を再び使用することで満足しなかったのであろうか。別の単語ではなくむしろある単語を採用することは、なるほど還元不可能な恣意的部分を含んでいる。それでも私には、<sup>アジャンスマン</sup>配置という概念は、私が支持しているある考えを明示的に喚起させるという利点を示しているように思われるのである。この考えは、少なくとも私はそう期待しているのであるが、上述でなされてきた提示から帰結するのである。<sup>アジャンスマン</sup>配置は活動を新しい観点から検討させてくれる。まず最初にそれが指摘するのは、活動に参画するエージェンシーがフォーマット化されていること、このフォーマット化は、エージェンシーとしてのその能力にとりわけ関わっていること、である。次に<sup>アジャンスマン</sup>配置が明らかにするのは、これらのフォーマット化が（これらの<sup>アジャンスマン</sup>配置を構想し、実施することを明示的な目的としている）実践全体から帰結しうることである。<sup>アジャンスマン</sup>配置は配置し agence、配置される agencé。

### 3. <sup>アジャンスマン</sup>配置と言いましたか？

装置＝デバイスという概念ほど、とりわけ社会科学においてこれほどまで成功した哲学的考察に由来する概念は少ない<sup>91)</sup>。この成功物語の出発点を特定しなければならないとすれば、おそらくミッシェル・フーコーの著作の中に、我々はその出発点をおくように導かれるであろう（Agamben, 2007）。この概念は彼の著作全体の中に存在するものの、彼はその正確で詳細な定義をどこにも記していない。とはいえ、1977年のインタビューがしばしば引用されている。

「私がおのその名のもとにつきとめようとしているのは、ことさら不均質なある全体であって、もろもろの言説や、制度や、建築上の整備や、法規に関する決定や、法や、行政的措置や、科学的言表や、哲学的・道徳的・博愛的命題を含んだものです。要するに、語られたことも語られないことも。それが装置の諸要素です。装置そのものは、これらの要素間に作ることでできるネットワークなのです。（中略）装置でもって、私は一種の——言うならば——編成体（フォルマシオン）を意味しています。その編成体は、歴史の一定の契機において、ある緊急事に応えるという主要な機能をもっていました。装置は、したがって卓越した戦略機能をもっています。（中略）私は、装置は本質的に戦略的な性質を備えていると言いました。このことはさまざまな力関係の一定の操作が問題となっていること、それらをしかじかの方向に発展させたり、遮断したり、安定させたり、利用したり等々のために、そうした諸力の関係の中に合理的で準備された仕方で介入することを予想しています。だから装置は、常に諸力の働き（ジュー）のなかに書き込まれています。しかしまた、そこから生まれ、かつそ

それを条件づけている知の一つの境界標、あるいは複数の境界標に結びついてもある。それこそが装置なるものなのです。すなわち、もろもろの知の類型を支え、またそれらによって支えられている諸力の関係こそが。」（Foucault, 1994, p.299 以下、増田一夫訳「ミシェル・フーコーのゲーム」『ミシェル・フーコー思考集成VI』筑摩書房、2000年、410-413頁）

Agamben が提案しているように、この定義は三つの点に要約することができる。(a) それは諸要素のヘテロな全体であり、装置=デバイスはそれ自体として、これらの要素を結合するネットワークなのである。(b) 装置=デバイスはその戦略的次元の故に、権力関係の中に統合されている。(c) かかるものとして、装置=デバイスは権力と知識の諸関係の間での交差から生じる。このように定義されると、装置=デバイス概念はきわめて広範な射程距離を持ち、同一のタームの中に監獄や警察、宗教等々、さらには市場を一括りにさせることができるのである。装置=デバイス概念は、生きている存在物（とりわけ人間存在）が、諸制約のネットワーク（存在物をフォーマット化することで、主体化=臣民化の新しい形態——ブルジョワジーやホモ・エコノミクス、キリスト教徒とその告解等々——と行為の流れを登場させる、継起的で歴史的な沈殿からしばしば生じる）に捉えられる際のメカニズムを研究することを可能にする。後にフーコーが強調することになるように、これらの制約は統治される者たちの側だけに関わるのではなく、統治する者たちもまた関与させるのである。

フーコーにより提案された定義の中で我々が見るように、装置=デバイス概念に求められる効果のひとつが、社会的なるものについての一つの見方（切断され区別された局面と場、サブシステム、制度の間での厳密な区別を確立する）から我々自身を解放することなのである。差異が存在するという考えを疑問視することが重要なのではないことは明らかである。こうした考えは、ある法律条文と科学理論、倫理原則、慣行<sup>コンヴェンション</sup>、工業的機械、エンジン、これらに差異が存在しないとあえて主張することになろうし、教会に入って、そこに教会の商人がいようがいまいが、それがスーパーマーケットではないことをにわかには納得しない、などと主張することになろう<sup>92)</sup>。むしろ重要なのは以下のような考えを支持することなのである。すなわち当該の活動領域にとって外在的な諸要素全体（だからこそ我々はヘテロさについて語るのである）を介入させ、動員させる迂回なしには、ある原則から別の原則へ、ある言明から別のそれへ、ある機械の世代から別のそれへなどなど、けっして直接的に移行することはない、ということである。フーコーであればおそらく以下のように付け加えることであろう。すなわちこうした迂回は偶然になされるのではなく、（まさに彼が指摘している装置=デバイスやネットワークがそこに存する）モデルや規則性に従っている。例えば、ある理論を主張するために道具を使用する際の特定のやり方や、その効率性を向上さ

せるために、ある機械をテストする際の特定のやり方などが存在する。要するに装置＝デバイス概念は、同一の運動の中で、規則性とイノベーションを捉えることを可能にするが、それは、構造や制度、もしくは場といった概念（我々は、これらの概念がいかなる点においてその規則性を押し付けるかがよくわかるようになったが、こうした概念はイノベーションを説明するのに困難なのである）に依拠する必要はないのである。

フーコーによりこのように定義された装置＝デバイス概念の利点は、以下のような観察可能な実践の詳細な分析の優先的性格を指摘することである。すなわち我々は今や、科学であろうが法律であろうが、経済等々であろうが、こうした諸実践が、（提示され、課せられている）諸問題にその場その場で対応するためのヘテロな諸要素の関連づけとして記述されなければならないことがわかるのである。装置＝デバイスは、創造とイノベーション、変化のメカニズムを説明するに十分にフレキシブルで可変的であり（再布置化可能であり）、またこうしたダイナミズムにおいて枠組みづけられているものを同定するにさいして厳格である。こうした条件においてなぜ、市場的配置アジャンスマンというよりもむしろ市場的装置＝デバイスについて語らないのであろうか。主たる理由は以下の事実にある。すなわちかかるものとして理解され使用されてきた装置＝デバイス概念は、まれにしか明示化されず、議論されていない（しかしこの概念の意味を深刻にゆがめてきた）仮説や先入観をこれに結びつけるように促すからである。

直面する最初の困難は、一方で生きている存在物と、他方で（上述で定義された意味での）装置＝デバイス——その中でこれらの生きている存在物が捉えられ、フォーマット化されている——との間での、暗黙裡に受け入れられてはいるが、ほとんど公然化されていない区別に由来する。大分割を繰り返すこうした傾向の指標の一つが、フーコーが検討している装置において社会科学が演じる戦略的役割について彼が強調していることなのである。フーコー的装置の中心にあるのが、（Agamben が言っているように、その存在理由を正当化する）以下の要請なのである。すなわち「有益であろうとする方向へと、人間の行為や振舞い、思考を統治し、コントロールし、方向付ける」という要請である。したがって装置 *dispositif* は人を掌中におくこと *disposer* を最初の機能としている。この帰結を達成するために、装置は人間の性向 *dispositions* を作り上げる。このことが意味しているのは、その人間的構成要素とノン・ヒューマンな構成要素とが装置の中で分離され得ること（その内部的エコノミーが疑問視されることなしに）である。こうして様々な科学的知識の間に導入されている非対称性が理解される。ノン・ヒューマンな科学は、人間的科学（それ自身、自らの目的からして、人間存在の主体化＝臣民化の企図において代替不可能な役割を演じる）に対して強い支援をするために必要なものとしての動員されるべき資源という役割へと放り込ま

れる。これをカリカチュア的に言えば以下ようになる。クオークについての知識はこうした企図に対して、すなわち性向の構築に対して、ほとんど実質的なことをもたらすことはない。他方で心理学や心理分析、社会学、もしくは経済学は、こうした主体化=臣民化以外の存在理由を持たないのである。しかしながら生命科学は中間的な状況にあることを指摘しなければならない。なるほどこれらの科学は客体化することに専念するが、しかし同時にこれらの科学は、人間的アイデンティティについて知られていること、それへの介入手段を根本的に更新するのである。だからこそ、きわめて興味深い、オリジナルな多くの研究が、遺伝学の貢献やバイオテクノロジーの貢献 (Rose, 2006; Rabinow, 1996)、ないしは医療的心理学の貢献 (Lakoff, 2005) をフーコー的図式へと統合したのである。アイデンティティの構築において分子が演じる役割の詳細な分析を提示することでいっそう遠くまで進むことができ (Keating & Cambrosio, 2012; Rabeharisoa et al, 2012)、装置と性向との間の溝をさらに縮減するのである。しかし、このわずかばかりの自己満足の表現を許してもらえらば、ヒューマンとノン・ヒューマンとの結合を、装置=デバイス——すなわち、場合によっては、また断絶をはっきりと強調するために変更される、合成 assemblage ないしアレンジメント、そして今後は、<sup>アジャンスマン</sup>配置——の製造の兆候とさせることで、こうした区別を決定的に克服することができたのがおそらく翻訳の社会学 (ないしはアクターネットワーク理論) なのである。

第二の限界は、部分的には上述のことから由来している。たとえこの限界が装置=デバイス概念の批判可能な (なぜなら還元主義的であるから) 解釈に由来していようと、しかしながらこの限界は潜在的にその定義の中に含まれ、その中で強く指摘されてさえいることを認めなければならない。結局、装置=デバイスの両極的な性格 (人間存在を掌握すると同時に人間存在が自由に使用し得るヘテロな要素のネットワーク) が暗黙裡に区別されている以上、ヘテロな諸要素の合成 (装置=デバイスがそこに存する) を、純粹に結合的な実践の可変の結果とさせるための道が準備されている。それはあたかも装置=デバイスの諸要素 (ヒューマンとノン・ヒューマン) の間での関係が、相互的な構築の関係ではないかのようである。すなわち装置=デバイスとその制約ネットワークとが、レゴのゲームのような合成に対して譲歩するのである。こうした逸脱が実践されていればいるほど、「装置=デバイス」という単語の翻訳は翻訳者に対して無数の困難を提起する。それは翻訳者たちが英語でその意味を説明しようとしたときである。通常採用されている device と apparatus という二つの単語は、技術的人工物の物質的で機械的な世界を喚起させてしまうという不都合さを有する。これらの単語は、二つの極 (ヒューマンのそれとノン・ヒューマンのそれ) の間での区別をいっそう強調するように促すのである。しかしながらフーコーはこれを切断する傾向にあったとしても、お互いを混合しようとするのである。不幸がけっして単独では起こらないよう

に、こうした誤った翻訳は、フーコー的分析を刷新させ、豊富にするためにドゥルーズとガタリによりまさしく導入された配置アジェンスマンという概念について提示されていた誤訳によって強められた。配置アジェンスマンという単語は、このタームが喚起させるように、これらのアレンジメントの行為する能力を強調することを目的としているが、翻訳者たちは、合成という概念（デバイス概念の限界を抑制するのではなく、この限界を繰り返す）に傾きがちであった。翻訳者たちは造語を想像できたかもしれない。すなわち例えば agencing という単語は、ある配置アジェンスマンが、行為するというその能力とその構成という二重の側面で検討されるエージェンシーであるということを示唆する利点があったことであろう。フランスの社会科学よりも、アングロ・サクソンの社会科学によりいっそうの影響力を持っていたフーコーは、なるほど、こうした翻訳＝裏切りで苦しんでいたが、しかし社会科学もまたこれから被害を被っていたのである。配置アジェンスマンは、合成 assemblage（その唯一の利点は、フランス語の単語であると同時に英語のそれでもあることである）、もしくはアレンジメントとして我々の前に再び登場した。これらの二つの概念はきわめて曖昧であり万能であるために、これらは、（ドゥルーズがフーコーに立ち帰って、これを定義したように）装置＝デバイスの中に、とりわけ配置アジェンスマンの中に新しいことがあることを忘却させるという恐れがある。

このことを、我々のアングロ・サクソンの特定の同僚たちも免れてはいなかった。彼らこそは、こういってよければ、こうした逸脱の最初の犠牲者なのであった。彼らが直面した困難と、いかに彼らがこれを克服しようとしたかは、私の意図にとっても利点をもたない訳ではない。Daniel Little のブログでなされた提案の例を挙げよう。私はこれを「合成 assemblage」でグーグル検索して発見し、そのコメントが私の注意を引いたのである。Little は（彼の社会学の同輩たちに）合成という概念の利点と限界を提示しようとしている。彼の出発点は Manuel DeLanda（2006）の著作であり、その目的の一つは、ドゥルーズとフーコー、そして翻訳の社会学の貢献を解説することである。DeLanda は——彼はこう言う——、その著作の中で、合成を構成している様々な要素（ヒューマンであろうが、ノン・ヒューマンであろうが）は、それ自身の生命と存在を有しているという事実を主張する。言い換えると、彼にとって、合成を構成している諸要素の間での関係は必然的なこと（有機的なこと）を持っていない。こうした関係は歴史的に偶有的なのである。社会科学の視点から検討すると、こうした定式化は、合成の特殊なオントロジーを強調するのだが、以下のような提案を導く。(a) 社会的なすべての実態はヘテロな諸要素（物質、ヒューマン、テキスト等々）から構成されている。(b) これらの要素のそれぞれはそれ自身のダイナミズム（それに関連づけられている空間と時間において展開する）を有する。(c) これらの要素の合成により構成されている全体は、（これらの諸要素の間で起こる）相互作用に応じて進化し変容する。す

なわちこれらの相互作用の効果は単純な因果関係には服さず、たいてい偶有的である。(d) ある一つの要素は、所与のデバイス／合成から抽出されることができ別のデバイスへと導入されることができる。そこではこの要素は（異なった効果を産出する）新しい相互作用に入るであろう。(e)（それ自体としてマクロもしくはミクロであるような）諸実態の間での区別は意味がない。すなわちある要素はある合成に含まれることができるが、こうした合成からいったん切り離されると、それは、今度は一連の諸要素を含み、またしたがって自分だけで世界を構成する一つの実体として考えられることができる。

著者は、この点を説明するためにある都市の例をあげている。この都市は住民や産業活動、道路網、組織、公共政策、政治運動、規制、無職青年、宣伝広告、等々を集めているものとして記述することができる。住民は（数年にわたって展開する）存在サイクルの中に統合される。他方で、企業は、数ヶ月にとどまる地平を持っている。都市の進化を予測することが困難なのは、住民と経済活動、選挙システムの進化などの間での相互作用が複雑で予測不可能だからである。合成として都市を記述することに明らかに利点が見られる（たとえこの概念が分析のよりいっそうのリアリズムを可能とするからでしかないとしても）。しかし同時に、こうしたアプローチが引き起こすかもしれない懐疑主義もわかる。合成を構成する複雑性を強調するあまり、また相互作用の予測不可能性と偶有的性格を強調するあまり、世界の複雑性を称揚するのではなく、（別の変数よりもより重要な変数を選択することを要請する）現実主義的簡略化に至る希望をあまりにも早く放棄するリスクを持たないだろうか。きわめて具体的に、こうした躊躇が以下のような疑問の中で表明される。すなわちいったいどの構成要素まで、合成を解体しなければならないのであろうか。というも諸要素のそれぞれはまたもや合成なのだから。都市の記述もまた、これが記述する都市よりも膨大になる。都市がそうであるよりもいっそうその記述を膨大にさせることに貢献するような記述であるようなことが起こるかもしれない。都市に妥当することは、市場についても、（市場がそこに存する）合成についても妥当するのである。

合成という観念が触発するこれらの疑問とこうした疑いに答えるためには、装置＝デバイス概念の中心にあった側面の一つ、より正確に言えば配慮の一つ（たとえそれが次いで、たびたびわきに追いやられていたとしても）に立ち帰らなければならない。配置<sup>アジャンスマン</sup>の概念がもたらすこと（装置＝デバイスや合成もしくはアレンジメントという概念がもたらすことができるであろうものよりもいっそう明示的なやり方で）は、行為の資源と様式の問題への解答なのである。配置<sup>アジャンスマン</sup>こそが行為するのである。配置<sup>アジャンスマン</sup>の概念のそれ自身の定義において（Deleuze et Guattari, 1975）、また同様にフーコーの著作への彼のコメントにおいて、とりわけ『監視と処罰』の彼の書評（Deleuze, 1975）において、ドゥルーズが強調しているのは、

配置アジャンスマンは、表現と内容との間の、物質的形態と定式化された機能との間の対立（とりわけ構造主義によって、また俗流とされるマルクス主義によって導入された）を乗り越えさせてくれることである。例えば監獄もしくは病院（その類似性はしばしば指摘されていた）のような物質的諸形態は様々な機能を実施する。すなわちある場合には処罰することであり、別の場合では看護することであり、これは、外見上、全く同一のものではない。合成 assemblage（もしくはアレンジメントないしはデバイス）と呼ばれる傾向にあったものと、それが展開し、構造化させる行為様式との間のこうしたもつれを指し示すために、ドゥルーズは、フォーコーにより提案されたダイアグラムの観念を採用する。このダイアグラムは特定のやり方で配置アジャンスマンの活動の輪郭を描く。パノプティコンとそのダイアグラムが、（ある課業や行為が課されるべき）多数の個人が関わる場合にはいつでも有用であることであろう。曖昧さを免れていない語義を明確にするために、私が提案するのは、配置アジャンスマンの概念を、アレンジメント+種別的行為という結合に割り当てることであり、争点となっている種別的行為のタイプを指し示すために、配置アジャンスマンという概念を指定するということである。こうして我々は、技術的アジャンスマン配置、政治的アジャンスマン配置、科学的配置アジャンスマンなどについて語る事ができよう。それぞれの配置アジャンスマンは、（それが組織する）フレーミングによって、特定の集合的行為様式に形態を与えるのである。提起される問題が、貨幣的支払いを対価としたエージェンシーへの財の愛着アタッチメント=接続の問題であるときにはいつでも、市場的配置アジャンスマンが有用である。行為の（もしくは機能の）こうした種別性は相互依存的な一連のフレーミング（上記のような）によって獲得される。これらのフレーミングがきわめて強い制約（行為を方向付け、行為を市場的にさせる）を産出する。しかし、すべてのフレーミングは氾濫を被るので（Callon, 1999）、こうした集合的行為は逸脱を産出し続け、したがって、回復され、変容され続けるのである。変化の問題に答えることが、私には最も単純なやり方であるように思われる。市場的配置アジャンスマンは、それ自身のフレーミングにより喚起された氾濫をぬぐい取ることはできない。市場的配置アジャンスマンが、その市場的特徴を維持する傾向にあるが、逆にこれがこうした特徴を消失させようとしようが、この配置アジャンスマンは進化しなければならない。これらの氾濫は、ドゥルーズが、装置=デバイスの消失線 ligne de fuit と呼ぶものと共鳴している（Deleuze, 1989）。

フレーミングについての我々の定義と、我々が提示してきたフレーミングのリストとが、合成とその特徴について語られてきたことと、いかに対応しているかを示すことは困難ではない。我々はそこにヘテロな要素を見だし、これらの要素のそれぞれがそれ自身の軌跡を辿ること、別の合成に入り込むこと、今度は合成として分析されることができていることを見いだすのである。我々にはさらに、豊穡な相互作用がある一方で、単純で一方向的な決定（例えば、価格の設定）はない。我々は正確さとリアリズムを増加させていることがわかる。し

かし同時に、もし我々がこうした記述に限定するならば、より伝統的なアプローチとの関係で失われていることも見るのである。この伝統的アプローチとは、観察されることとは隔たった記述を提供するとはいえ、こうした記述が説明するメカニズムの理解を容易にすることに貢献するものである（よく同定された、最適化を図るエージェントを登場させる型通りの表象であろうと、アクターのネットワークもしくは場の、これまた型通りの表象であろうと）。

これらの損失の多くの部分を消し去ることができる。というのも合成という単語が消失させる傾向にあるものを分析の中に再導入するからである。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置の我々の説明の中心にあるのが、フレーミングの問題、つまり活動の分散の問題である。私は例えば、財（受動的に行為するようにフレーミングされた）と、これを評価する「エージェンシー」との間の非対称性を主張してきた。私はまた、価値づけ的エージェンシーの能力と装備について、価値づけのプラグマティズムにおいて定式が演じる役割について、突き合わせの組織化により関与させられる行為の流れについて、詳細に記述してきた。こうした単純な列挙が示しているのは、アナーキーで混沌とした合成（そこでは、諸実体は、神様も法律もなく、絶望的に、また回復不可能なほどに、表現しがたい無秩序を生み出すように行為するかのようである）についての見方から我々はかなり遠く離れていることである。直裁に言えば、市場的合成は、（活動の流れをフォーマット化している）フレーミングにより構造化されていると同時に活動の争点である。だからこそ合成を<sup>アジャンスマン</sup>配置と呼ぶことが好ましいのである。

集合的行為とその構造化に分析を集中することで、<sup>アジャンスマン</sup>配置の複雑性の考慮は、いかにしてそれぞれの<sup>アジャンスマン</sup>配置が、それ自身で生命と、それと同時に、分析家の生命を単純化させるかを理解させてくれる（Callon & Latour, 1981）。単純性は出発点ではなく、到達点なのである。すなわち石油の市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置の漸進的構築を説明するために、Mitchellは300ページを要したとしても、結果を、すなわち（その機能を設定している）規則を記述するには20行あれば十分なのであった。しかし当該の300ページは、読者に対して、またこれらの規則に満足しないすべての人たちに対して、（単純ではあるが異なった市場に到達しようと望むならば、働きかけなければならない）すべての要素を提供するのである。観察者は、単純化された、現実主義的な表象に到達するために、複雑さとヘテロさを自ら解消しなくてもよい。なんとなればそれはまさに、<sup>アジャンスマン</sup>配置が行うことだからである。もちろん、<sup>アジャンスマン</sup>配置は、市場的集合的活動のフレーミングの作業をうまく導くためには、これを観察している人々によって確立された様式を動員することを禁じられてはいない（Muniesa et Callon, 2009）。ここにこそ、（市場のフレーミングに貢献する）かなり理論的で、かなり応用的な知識全体を通じて、経済＝モノの遂行、とりわけ具体的市場の遂行の視点が介入するのである。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置のいっそう多くの部分が、経済学者や心理学者、マーケター、法学者、会計学専門家のみならず社会



学者たちによってなされた研究にますます多く由来している。市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>はこれらの知識により配置され、このことはとりわけ、その強い構造化を説明し、また市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>が自然的秩序とも、名状しがたい混沌とも似ていないという事実を説明するのである。

行為し、行為させる市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>の能力は、その構成そのものを通じて、特定状況において、市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>がなぜ、固有な活動能力を付与された実体へと変容するのかを説明している。すなわち、「パリ証券取引所」が上昇している bullish、もしくは下落している bearish と言われるとき、もしくは、石油「市場」が低迷していると言われるとき、我々は以下の事実<sup>アジャンスマン</sup>に依拠している。すなわちこれらの配置と、これが作る（作らせる）ものを総合し、特徴付けることができるという事実、このようにブラックボックスに入れられることで、これらの配置<sup>アジャンスマン</sup>は別の配置<sup>アジャンスマン</sup>へと、また別の活動の流れに（金融アナリストによって、年金基金によって、IMFによって）取り込まれることができるという事実である。それは単なるメタファーではない（想像される単語が、市場の行為を特徴付けるために、またこれに形を与えるためにしばしば使用されているとしても）。というのも、（分散的活動のコーディネーションを保証する、その内部的フレーミングのまとまりと、その相互依存性のために）堅固なものとなっている市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>のブラックボックス化は、総合的度量衡的構築物によって要約される。こうした構築物が、CAC40 指数はかなり上昇している、もしくは石油市場が暴落している（あるいはその逆）、と述べることを可能にするのである。

集合的行為に貢献する様々な諸実体の整列化（株式市場におけるように、その極限までもたらされる）は、それらの要素のそれぞれが、集合的行為の別の形態へと、配置<sup>アジャンスマン</sup>の別の形態へと同時に取り入れられることを忘れさせるべきではない。見てきたように、これこそが合成の本質的特徴の一つなのであり、合成はこのように通常、定義されており、また配置<sup>アジャンスマン</sup>はお互いを共有しているのである。要するに、同一活動が複数の形でフレーミングされることが可能なのである（セールスパーソンについて、彼は複数のカードを切っている multi-cartes、と呼ばれているように）。例えば、ある企業の製造エンジニアもしくは販売部員と共同のプロジェクトで働いている大学の科学者は、市場的配置<sup>アジャンスマン</sup>に「捉えられている」が、しかしその活動はまた、科学的とされる配置<sup>アジャンスマン</sup>のステークホルダーでもある。この科学者が、同僚たちによって反対されたり、無力にされたり、妥当とされたりすることができる言明に至る集合的活動に参加している限りにおいて、そうなのである。同一の活動が、また集合的に、また同時に利他的関係へと向けられることができる。それは、彼が自らの研究を行うために寄付を受け付けるときであり、もしくはある同僚やパートナーに、物質やコードラインを移転するときである。あるいは、彼が例えば、倫理的理由のために、特定の研究戦略を発展させることに躊躇するような場合、この同一の活動が倫理的配慮へと向けられうる。消費

者たちもこれらのマルチ・フレーミングを免れてはいない。すなわち彼らは、SFR パックを購入して、これを近親者の一人に供給することができるし、もしくは彼らが自分でブリコラージュする人であるなら、その使用を迂回して、監視の私的なデバイスを構想することができる。同様に、コジェネレーションを開発し、その経済的収益を最適化しようとするエンジニアが、それでもやはり、洗練された技術的作業への配慮をやめず、専門家の共同体（彼らが構想する市場の効率性に価値を付与する）に介入することができる。企業のエコノミスト（彼らは投資収益を最大化するように求められている）が、彼らが提供する価格設定の中に、倫理的な配慮を導入することさえ起こる（上述を参照）。日常茶飯な、けっして例外ではない、こうした緊張は、職業社会学や倫理社会学、政治社会学、また組織社会学により何度も記述されてきた。これらの社会学が絶えず想起させるのは、たった一つの行動論理だけでは、実践の豊穡さと複雑さを吸収することができない、ということである。集合的で、分散された活動を理解するために必要な<sup>アジャンスマン</sup>配置という概念は、これらの緊張を消失させるのではなく、それを説明するために通常使用されている分析枠組みを修正するように促すのである。<sup>アジャンスマン</sup>配置について語ることは、様相や規範、価値、シテ、さらにはコーディネーション様式、レギュレーション様式の観点からの分析を放棄することである。工業的イノベーションのプロジェクトに介入する大学の研究者は、彼に対して外側から彼らに課せられているような諸要請を和解させることを要請されてはいない（そうしようとも思わない）。彼らの活動は（彼らとそのステークホルダーとなっている）様々な<sup>アジャンスマン</sup>配置によりフォーマット化されている。すなわちこの大学研究者が働きかけている事物は、またその結果として、彼の労働そのものは、（彼が関連づけられている）多様な分散された集合的活動によりフレーミングされている。この大学研究者が、がん腫瘍の成長をブロックする分子メカニズムを研究しているとき、彼が操作し、彼が分析している事物は、医薬品（支払い能力あるクライアントはこれなしには済まされないであろう）の研究によって、それと同時に、（批判と反論に対して抵抗する）言明の生産によって、プロファイルされている。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置に介入する<sup>アジャンスマン</sup>配置全体について同一の分析がなされることができる。エンジニア・エコノミストにより精緻化される定式は彼の表現そのものの中にクライアントの把捉と、特定の品質の追求とを考慮する。体系的な分析の対象をなすに違いないようなこれらのいくつかの事例が示しているのは、その場所のそれぞれにおいて、市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置は、別のタイプの<sup>アジャンスマン</sup>配置へと接合されていることであり、こうした接合は、フレーミングの様式そのものの中で、すなわち、（例えば、分子メカニズムに対して、もしくは携帯電話、コジェネレーション、価格設定に対して与えられている）定式の中で、こうした接合が演じられているということである。定式化のこうした作業は、とりわけ（その下で、こうした作業が接合される別の<sup>アジャンスマン</sup>配置に対して、

ある配置アジャンスマンがローカルに優越しているような）条件を同定することを可能にするに違いない研究対象全体をなしている<sup>93)</sup>。本稿における私の目的にとっては、以下を強調するだけで十分である。すなわちある配置アジャンスマンについて、それが市場的であると語ることは、この配置アジャンスマンがそれを構成している諸活動を完全に吸収しているなどと断言することではない。市場的配置アジャンスマンは、分析領域を拡大させ、なしうる介入の空間を開放するから、この配置アジャンスマンは、市場が至る所にあるという幻想を与えるかもしれない。しかしそれは幻想である。というのも、それぞれの場所において、市場的配置アジャンスマンは、配置アジャンスマンの別の様式へのとっかかりをもつ（そして接している）からである。市場的配置アジャンスマンは、ある地帯の内部で発展しているのではなく、（フラクタルのそれについて考えさせるような）位相学もしくは幾何学にしたがって発展するのである。

#### 4. 市場的配置アジャンスマンの分散的な政治的エンジニアリングの方へ——市場の終焉？

市場的配置アジャンスマンの分析が以下のようなようであったならば、1時間もの苦勞をかけるに値しないであろう。すなわちもしそれが、これらの配置アジャンスマンの構想やその機能、（これらの配置アジャンスマンが提起する）問題解決、（これらの配置アジャンスマンが産出する）効果の方向付けの中に介入することを望むすべての人々に対して手がかりを提供するに至らなかったならば、である。市場的活動に干渉する意欲（その市場的特徴を疑問視するほどには至らずとも）はオリジナルなものではなく、配置アジャンスマンの概念は、（市場＝インターフェース）の概念が許容させた展望に対して、新しい展望を切り開く（干渉の概念についてはLaw（2004）及びLaw & Urry（2004）を参照）。

市場＝インターフェースは特定の介入を促すデバイスをなしている。例えば、競争が実効的であるように、また財の価格が、最適であると判断されるレベルで確立されるように、市場＝インターフェースを形成することができる。我々はまた、情報の生産と流通を改善することができるし、財の品質を保証することもできるし、所得の不平等にたがをはめることも、所有権を強化することなどもできる。何らかのやり方で、市場を規制し、組織することを目的とする活動のリストは長い。このリストはまた同時に進化的である。こうして、ここ数年来、新たな介入形態、すなわち経済理論のそれが見られる。市場＝インターフェースは、まるごとイノベーションの対象となり、専門家共同体がこのエンジニアリング作業（例えば、競売デバイスを構想し、組織し、排出権市場を整備し、より効率的なインセンティブメカニズムを提案し、需給を突き合わせるためのアルゴリズムや情報システムを構想する、などに至る）に特化する。要約すれば、経済理論の遂行的活動が豊富化され、公共エージェンシーのより伝統的な活動に追加されるようになるのである（公正取引部局、環境エージェンシー、工業財産権部局、団体協約など）。これらの活動全体を指し示すために、技術的エンジニアリン

グについて語ることができる。というのもそれは、たいていの場合、専門家の権威の下でなされるからである。これらのエンジニアリングは、(市場=インターフェースの限界である)限界に突き当たる。こうしたエンジニアリングは、財の品質規定についても言うべきことはなく、その構想過程についても、エージェンシーのフォーマット化のメカニズムについても、財への彼らの<sup>アタッチメント</sup>愛着=接続様式についても、彼らに提供されている(あるいはされていない)支払い価格の設定を交渉する可能性についても言うべきことがない。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置と、相対取引の制定に向けられたその活動によって、これらのすべての問題が配慮と論争の種になる。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置は干渉の機会を拡大させ、(この<sup>アジャンスマン</sup>配置が必要とするフレーミングの形態と場所の増殖のためにのみ)その必要性を増加させさえするのである。提起された問題と、検討される解決策との広がりが顕著に拡大する。<sup>アジャンスマン</sup>配置の構想が、(承認され、組織されるに値する)活動全体となるのである。

一方で市場=インターフェースを再布置化させるための介入の、狭く限定された特徴と、他方での市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置を作り替えることを目的とする介入の広がり複雑さとの間での、こうした対立から、コメントが必要になる。市場=インターフェース概念の利点は市場の広がり、一瞥して見渡せる狭い地帯へと縮減することである。こうした見方は、市場を抑制し、もしくは市場を厄介払いすることが容易である——なんとなれば市場は完全に限定することが可能で、明確に輪郭を描かれるからである——という幻想を促す。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置の概念はこうした容易さに与しない。すなわちこの概念は、(市場的取引を可能にし、持続的にする)多様な根とリゾームを完全な明るみのうちに登場させる。すでに理解されたことであろうが、市場が至る所にある、と言うことが重要なのではない。というのも、ある意味市場はどこにもないからである。すなわち結局、<sup>アジャンスマン</sup>配置を構成し、<sup>アジャンスマン</sup>配置によりフレーミングされるそれぞれの場所の中に、その他の形態の<sup>アジャンスマン</sup>配置が混合されているのである<sup>94)</sup>。しかし相対取引の展開に働きかけるために、また可能性のこの条件に、またこの可能性がまとう様式に働きかけるためには、自らの前に、<sup>アジャンスマン</sup>配置の完全な地図を持っていなければならない。もしこのメタファーが、市場についてのまったくもって否定的すぎるイメージを導入しないとすれば、私は、我々が見ている取引、市場=インターフェースがそこに限定されている取引は、栽培のために準備されている菜園に根を張っている雑草のようなものである、と言うであろう。すなわち、根っここのネットワークを忘却するならば、それを根っこそぎするためにそれを切り刻み、それを抑制するために外見上の葉っぱを引っこ抜いても無駄であり、葉っぱは再生し、少し離れた場所に広がり、菜園全体にはびこることになるのである。市場という単語は、葉っぱに注目を向けるのであって、根っこにはない。(フレーミングされ、方向付けられた活動としての)市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置について語ることで、我々は、リゾームを検討すると同時にその

葉っぱ表面の白粉状ワックスを検討することができるのである。

したがって私が提起することは、(市場の利益を賞賛する新自由主義的集団に追加的な一票を投じる) イデオロギー的インフレーションの方向に進むのではない。追求されているのは全く逆のことである。市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置の再フレーミングと変容に、成功裡に入り込むことができるためには、事前に、リゾーム(市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置が必要としている樹液をこれらにもたらす)を追跡しておかなければならなかったのである。誰があえて、市場=インターフェースをたちまちのうちに改革することができるなどと想像しようとするのだろうか(川上に、すなわち将来の財が準備され、プロファイルされる実験室や設計エージェンシーに赴くことなく、もしくはクライアントのプロフィールが作り上げられ、調節される、商業サービスやマーケティング部局に入り込むことなく)。同様に、フレーミングの完全な連鎖と、こうしたつながりが産出する補強効果を考慮することなしに、エージェンシーの間での力関係を修正することを想像できようか。価格設定時に、また価格設定の中で演じられ、決着がつけられる力関係は、財の受動化とその品質の設定の時点で準備され、さらに、品質<sup>アジャンスマン</sup>計算的コンピテンスのフォーマット化の中で、さらには、突き合わせの場所の組織化において、市場的<sup>アジャンスマン</sup>情動 affectio mercatus の生産においてもまた、準備されるのである。より一般的に、市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置の概念は、その領域を選ぶ以前に、市場に反対して、もしくは市場とともに行動するかを決定する前に市場についてすべてを知らなければならないという考え方を取り除いてくれる。なんとなれば市場は存在しないからである。我々はすべて、(お互いに押し合いへし合いしている<sup>アジャンスマン</sup>配置の間での直面に捉えられている)「配置者 agenceurs」である。すなわち提起される唯一の問題は、どこで、何にたいして、誰とともに介入すべきかを知ることなのである。

どんな財を、どのエージェントのために、どんな価格で? 不可避免的にコンフリクトを生み出すのがこうした問題であり、市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置はこうした問題に答えることを担っている(市場=インターフェースにとっては、優先的問題は価格と量である。というのも、財の構想も、それが向けられるエージェントの同定様式も、直接には考慮されていないからである)<sup>95)</sup>。構想可能な介入の多様性という考え方を与えるためには、フレーミングを一つずつ考察することで十分であろう。フレーミングが相互依存的であること、それは最終的な相対取引を準備するべく、プロファイルされ、つなげられなければならない、ということ意識しておきつつも。本稿では、私の意図は、(市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置のフレーミングが引き起こし得る)問題の総覧を作ることではないし、ましてや可能な回答のリストを与えることでもない。したがって私はいくつかの考察で満足することにしよう(検討作業の本質がまだ実施されていないままであることがわかっていると)。第一に、フレーミングのリストが、可能な介入=

干渉の最初の分類を提供する。財の受動化の様式の問題と、前者と結合した、(それと結合されることができる) 所有権の定義の問題にもたらされる回答の性格は、市場的活動の諸形態を顕著に変容させることができる。それは、エージェントの品質<sup>アジャンスマン</sup>計算的<sup>アジャンスマン</sup>装備という観念についても同様である。すなわち例えば、経営手法や会計手法の選択は、顕著に異なった方向へと市場的活動を方向付けることができる。市場的突き合わせの組織化と、(愛着<sup>アタッシュメント</sup>=接続へと、次いで支払い意欲へと促す) 情動の管理についても同様であり、もしくは価格の形成についても、競争的定式化の間での関係についても同様である。例えば市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置が資本主義的になるためには、突き合わせの場所のフレーミングの特定形態と結合した、うまく構想された何らかの道具があれば十分なのである (Braudel, 1985)。第二に、(所与の市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置にとっての) これらのフレーミングのそれぞれの様式についての議論と交渉 (もしそれがあある場合) は、必然的に状況におかれ、分散されている。すなわち自らの議論と再布置化に最初に関与するのが、これらのフレーミングに該当するエージェンシーたちなのである。第三に、社会科学が、考慮されるべき種別的役割を有している。社会科学は全体のプランを描く建築家を気取っているわけではないし、当該のあれこれのエージェンシーの単なるスポークスパーソンへと自らを変容させることが重要なものでもない。彼らの可能な役割の一つは、状況に埋め込まれた調査の組織化へと、(特定の (再) フレーミングがもたらす) 効果についての考察へと、そこから生じる全体のダイナミズムへと参画することなのである。第四に、再フレーミングの究極の争点は、価格定式化戦略の実質的修正に関わる。というのも、上述のように、市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置のダイナミックな構造化を組織し、その堅実性について、詳細に意思決定するのはこの戦略だからなのである。可能な介入と、その様式の単なる数え上げが示すように、企図されるべきプログラムは膨大である。しかしそれはポランニーの期待に応えるために支払われるべき対価なのである。すなわち市場的活動には最悪のことがあることを用心しつつも、この活動の中にある望ましいことを維持することである<sup>96)</sup>。

結論を下す前に、私は最後の指摘を行っておきたい。少なくとも私は期待しているのだが、読者は、市場=インターフェースから市場的<sup>アジャンスマン</sup>配置への移行が、展望の完全な逆転に対応していることを理解されたことであろう。相対取引が市場的活動の中心的な姿となる。そこから、市場は、前市場的とも言うべき諸形態と断絶していないことになる。市場は、それに先行するとされるものとの継続性のいかなる解消も導入しない。市場と呼ぶことが慣例となっているものは、相対取引の現実をそれほどまでに真面目に捉えている組織形態であるために、この組織形態はこうした取引の保持とその強化を、自らの究極的目標とし、自らの持続的な配慮とするのである。ある相対取引は、それが慎重に予めフレーミングされていないならば、また注意深い配慮の対象となっていないならば、脆弱で、短命であろう。というのもあらゆる

る時点で、パートナーたちの一人は別の取引に参与するために、あるいは単純に、交渉を再びフレーミングするために、コミットしないこともできるからである。複数の理由のために、こうした脆弱性が損失的であると考えられるとき、課せられる解決策は、相対取引がより頑強で、それほど脆弱でないように、投資することである。市場の歴史は、長い一連の発明と、強権発動、陰謀、知識やノウハウの生産へと要約することができるように思われる。これらが、相対取引を活気づけ、その数と多様性を増殖させることを可能としたのである（その堅実性とその刷新を自らに確保しながらも）。全くもって直線的ならざる、この歴史において、おそらくかなり複雑で、持続的な様々な形態を総覧することができる。これらの形態はお互いに対立し合い、お互いを生み出している。これらの一大絵巻——市場的絵巻ではなく、市場的配置アジャンスマンの絵巻——において、強いイノベーション・レジームがある種の絶頂を示している。というのも相対取引のフレーミングに、また価格の定式化に参画するために動員されるのが、多くの場所だからであり、そのうちのいくつかは構想過程のきわめて上流に位置しているのである。Geertz (1978) がかくもうまく記述しているように、モロッコのセフルのバザールは別の解決策を提示しており、メディナの迷宮を一連のトラック競技（継起的な把捉によって、潜在的顧客をその売手に掌握させる）へと変容させるのである。見てきたように、市場的相対関係を制定するためには集合的活動を組織する膨大な数のやり方がある。しかし私には、現代的な市場的配置アジャンスマンがよりいっそう遠くへ進んでいるように思われる。というのもそれは、最も基礎的な研究の実験室へと拡張され、洗練された技術を動員し、マーケティング及びロジスティックの技法や知識を永続的に発展させ、更新し、フレキシビリティとプロジェクトによる組織化を案出しているような集合的活動を構造化するなどしているからである（学術的要請についても遜色ないほどに）。我々はこのリストを拡張することができるかもしれない。そしてまた、それがなんであれ最も詳細な総覧に至ることが、市場的配置アジャンスマンの、またそのフレーミングの研究の争点の一つである。社会は市場の社会とはならない。その支配力を拡張させ、テクノロジーと知識を刺激し、それと同時に、仕事とコンピテンス、アイデンティティ、情動を更新させるのは、市場的配置アジャンスマンなのである。

ヨークの限界で Pinch (2010) により描かれたシーン、Guyer (2004) によって、もしくは Roitman (2005) によって分析されたアフリカにおける交換、また携帯電話市場や綿花市場、エネルギー市場といった表現により描かれること、これらを市場的配置アジャンスマンという同一のタームへと一括りにするように促す、こうした連続性がいったん受け容れられるや、差異の記述のみならず布置の選択と関連した争点が性格を変えるのである。それが何であれ市場的配置アジャンスマンは、同一タイプのフレーミングと同一のシークエンス（受動化させ、活性化させ、突き合わせを組織し、情動をかき立て、接続アタッチさせ、支払わせる）により定義される。一つの

<sup>アジャンスマン</sup> 配 置 から別の <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 へと変化しているのは、これらのフレーミングの具体的様式なのであり、それらが行われる場所の多様性であり、これらのフレーミングが描く空間的、時間的枠組みであり、動員される物質であり、実施される知識と道具の形態であり、さらにはまた場所の間での相互依存性のネットワークのモルフォロジーなのである（これは純然たる整列化と分散化との間で動揺することがあり得る）<sup>97)</sup>。単純で基本的な区別は、一方での相対取引（弱く予めフレーミングされ、それほど統合的ではない集合的行為から生じる）と、他方での相対取引（集中的で、多様な、強く構造化され、整列化された集合的行為を取り仕切る）との間での区別である。こうした純然たる対立は、上流での構想活動（とりわけ研究開発）を強力に統合する市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 と、逆に、これらの活動に対して、よりいっそう重要な裁量の余地を残している市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 との間でのコントラストのような、政治的に興味深い、別の対照を忘却させるべきではない<sup>98)</sup>。いずれの場合にも、価格の定式化の様式が、別のタイプの <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 よりも、あるタイプの <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 への方向付けにおいて中心的役割を演じる。こうしたアプローチの結果の一つが、市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 の政治的エンジニアリングの前に開かれている空間が膨大であるということである。なんとなれば最も単純な形態（前市場的 pre-marchandes 形態へとこれまでとかく結合されていたような）が考慮されることを何もかも妨げることはないからである。すなわちセフルのスクは、周波数の配分のための競売の組織化よりもいっそうエキゾチックなのではない。また農民的農業保護協会 AMAP（有機農産物の産直運動）は必ずしも、地球の広がり全体をカバーする <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 がそうであり得る（かもしれない）よりも、いっそう連帯的であるとは限らない。選択の複数性に直面して、市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 の政治的エンジニアリングは構造化されることを要求している。だからこそ、市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 の研究は、論争と実験の形態への考察（その構想とその実施が要請する）を伴わなければならないのである<sup>99)</sup>。しかしこうした運動が検討可能であるためには、まず、市場の終焉の問題、すなわち市場に割り振られている目標の問題と同時に、市場的 <sup>アジャンスマン</sup> 配 置 によるその代替の問題を提起することを受け容れなければならないのである。